

あらかわ



発行●NPO法人荒川流域ネットワーク編集委員会／編集人●鈴木勝行
住所●358-0046埼玉県入間市南峰400-4 FAX04-2936-4120
ホームページ●<http://www.arariver.org/>

CONTENTS

①

槻川沿いに残された昭和の情景

②

Network News

入間川でアユの標識放流作業を実施
菅間堰の改善事業について県と協議
小畔川に階段式魚道が完成

③

Network Information

荒川流域一斉水質調査を実施
今年も3ヶ所で地曳網を開催
森づくりの現場から
気仙沼に蠣殻を復活させる

④

いきものの道・魚の道

2011年度の「アユ溯上作戦」
の実施結果報告

⑥

17年間の荒川流域一斉水質
調査についての考察

⑦

自然再生通信

荒川太郎右衛門地区自然再生
事業の活動報告

⑧

「NPO法人比企自然学校」設
立のお知らせ

topics

入間川上奥富堰の災害復旧
工事が進む



桜吹雪が舞う小川町にある小川小学校下里分校。(2012年4月17日・撮影：鈴木)

槻川沿いに残された昭和の情景 小川町立小川小学校下里分校

今年、アユの標識放流作業を行う予定になっている小川町の槻川にある下里堰のすぐ脇に、小川町立下里分校がある。4月17日に見に行った時立ち寄った校庭には、一面に満開のソメイヨシノの花吹雪が舞っていた。

新緑とヤマザクラに彩られた山に囲



まれて佇む分校は、遠い昔からあっただろう春の里の景色そのもので、年配の人には懐かしい風景である。

この分校の歴史は古く、1874年に開校、1901年にこの地に移転し、第二小川尋常小学校として建てられた。1925年から第一小川尋常高等小学校分教場となった。現在の校舎は1964年に建替えられたものである。

1945年4月に、下里分校に入学した女性が以下のような回想を残している。「分校近くの河原は、現在のように雑草が茂ることもなく、清流ときれいな川石、砂利、そんな場所だった。春先から夏にかけて、私達は日課のように泳ぎ、魚を捕り、水遊びに没頭し、はしゃ



学校のすぐ脇を流れる槻川と下里堰。

いだ。秋から冬にかけては、教室がストーブに暖められることもなく、寒さに戸外に出ては、陽だまりで押しくらまんじゅうや、馬乗りをした。女子はアヤ取りが盛んだった。」『小川小学校誌』(資料提供：稲田滋夫氏)

2003年から休校中で、現在は教育活動の拠点施設として市民に無料で開放されている。問い合わせ先：小川町教育委員会 学校教育課 (鈴木)



入間川の小瀬戸堰上流でアユの標識放流を実施。上流部の溯上環境を調査する

2012年4月22日に入間川の標識放流作業を小瀬戸堰上流にある弁天橋下で、17名が参加して実施した。

平成24年は、稚アユの溯上期である4月に気温の低い日が続き、そのため東京湾からの溯上が、2週間以上遅れた。例年なら秋ヶ瀬堰の下で大量に捕獲できる時期だが、今年は捕獲数が少なく、放流予定の半分の約5kgしか確保することができなかった。

それでも、入間漁協に秋ヶ瀬堰から作業会場まで、漁協の運搬車で稚アユを運搬してもらうなどの協力をしてもらい、なんとか標識作業を実施するこ

とができた。

作業のための生簀や鉄筋やバケツなどの道具類は、前日に熊谷市にある倉庫からトラックに積み込み、会場近くに運搬しておき、当日会場に運び込んだ。

今年度の入間川は、昨年度の放流調査で標識アユが溯上できなかったと思われる小瀬戸堰の上流で行った。

入間川の上流部であるためか、水温は10.5℃と低く、14℃だった運搬してきた水温との温度差が多く、稚アユに対する負担が大きいのではないかと心配されたが、網生簀の中で稚アユは、予想外に元気に泳いでいた。



河川水温が低いため、手が冷たくなり作業は大変だったが、3つの班に分かれ、約1時間で1,373尾の稚アユのアブラビレを切除して入間川に放流した。

放流した稚アユは、溯上に向けて準備を整えているかのように、上流に向かって群れを作り、泳いでいた。

放流した稚アユの平均体重は2.5g、平均全長は8.0cmであった。



菅間堰溯上環境改善の事業計画案について県農村整備課と流域再生プロジェクトが協議

2012年2月6日に菅間堰の溯上環境改善について、埼玉県の農村整備課と流域再生プロジェクト・独立法人土木研究所の村岡敬子氏も交え、協議を行った。

協議の内容は、来年度の工事の実施に向けて、基本設計ができたので、その計画をもとに、具体的な施工内容につ

いて詰めて行くということであった。

この工事の設計を受けたコンサルタント会社から工事設計と工事方法についての説明があった。工事は、土地改良区が占有しているエリア内の堤体の下流側で行うこと。工事手法としては、堤体の下に投入されている異系ブロックの間に流水に投入できる特殊なコンクリートを流し込んで固める。上部に突出したブロックを削ることで、斜度約10分の1の水道を左岸側の堤体下流部に形成するというものであった。

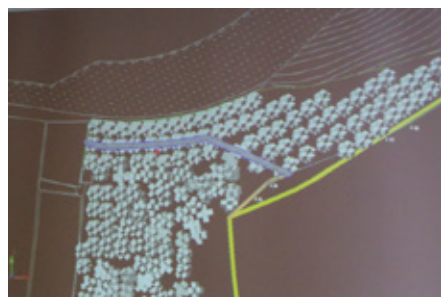
それに対して、「流速を落とすため流路を変更することで、斜度を緩くできないか」「途中で休息するためのプールをつくれぬか」といった意見が



出された。

とくに大きな課題となったのは、上流部の堰堤下に発生している60cmほどの落差についてであった。しかし現状では堰の所有者である土地改良区の方の了解を得なければできない作業なので、今後土地改良区と調整しながら進めて行くことになった。

今年の4月で県の方の体制も変わったことから、5月中旬に顔合わせを兼ねて、協議を提案したいと考えている。



私たちネットワークが提案した小畔川における全断面魚道が6月に完成予定

私たちネットワークが提案した13ヶ所のうちの1つである川越市御伊勢原の小畔川の水辺再生事業が、完成間近になった。単調な水際と60cmぐらいの落差工がある河川環境を魚が棲息しやすく、移動し易い環境に変える提案を、小畔川の自然を考える会と一緒に行った結果、事業の候補地として採用され、今年度工事が行われてきた。

落差工は、具体的な設計段階での打ち合わせができなかったため、私たちが提案しようとしていたものとは少し違っていたが、階段状の全断面の魚道になり、以前よりは魚にとって移動し易い環境になったと思われる。

護岸については、幾つかの石を鉄柱で組み合わせたものを水際に設置する



改修前の床固め工（左）と改修後の階段状の魚道

工事が行われていた。水際をコンクリートで固めたままでの改修であり、こうした工法しかなかったようだ。

NetWork
Information
1

2012年度の荒川流域一斉水質調査を 6月3日(日)に実施予定。

今年も例年通り6月の第1週の日曜日に荒川流域での一斉水質調査を実施する。近年は、利根川水系の河川や新河岸水系など荒川流域以外の団体の参

加も多く、埼玉県全体の河川の水質調査になっている。

調査項目は、COD(化学的酸素要求量)とEC(電気伝導率)の2つ。ECメ

ーターは、5月20日のCODのパックテストとともに、参加団体に配布する。

今年も、鶴ヶ島市の農業交流センターで開催。水質についてのシンポジウムも開催し、過去の水質調査のまとめの公表と参加団体同士の情報の共有化も計る予定である。

NetWork
Information
2

今年も7、8、9月に高麗川、都幾川、越辺川 で地曳網漁の体験イベントを開催

昨年は、150名近い参加者があった越辺川水系での親子の地曳き網体験のイベントを今年度も高麗川、都幾川、越

辺川の3河川で開催する。実施日はこれから地元の団体と調整して決定するが、7月に高麗川の日高市、8月に都幾川の二瀬橋、9月に越辺川の鳩山町で実施する予定で作業を進めている。

地元だけではなく、埼玉県の東部や東京から参加する人も多く、楽しみにしている人も多くなった。天候に左右され、難しい事業だが、安全に配慮しながら開催したいと考えている。

イベントの詳細についての問合せは、090-7804-5722鈴木まで。

森づくりの現場から Vol.12 森林ボランティアの震災復興支援

埼玉県のモウソウ竹が気仙沼湾に蠣筏を復活させる

非営利活動法人つるがしま里山サポートクラブ 吉井優

つるがしま里山サポートクラブは、被災地に対して、どんな震災復興支援ができるか模索していました。

昨年4月には、南三陸町の避難所から、仮設風呂用薪作りのためのチェーンソー講習を依頼され、協力してきました。その後、鶴ヶ島のSNS「タウンチップ」から生まれた「東日本大震災復興支援プロジェクト」に参加しました。

9月には、気仙沼のNPO「森は海の恋人」から杉の伐採を依頼されました。牡蠣筏用の杉材の確保と、運び出すための橋作りを行ないました。女性メンバーは、炊き出しも行ないました。

その際、筏の材料として竹を調達できないかと打診を受けました。家も仕事も失った方々をつなぎ止めるために、牡蠣養殖産業の復興が地域の悲願であるとのことでした。これを受けて、鶴ヶ島での竹林伐採事業が始まりました。

鶴ヶ島でも、竹が用材として使われず、あちこちの竹林が荒れ放題の状態です。屋敷や道路にはみ出したり、畑地に進出してきたりしています。

この困った竹が、震災復興支援に、使われ、近隣の竹林が整備されることになれば関係者全員が得する事業です。

牡蠣筏には、9mの竹が使われます。先端は直径7cm以上の太さが必要です。この条件を満たすには、ほぼ高さ15m以上の孟宗竹を選んで伐ることになります。丁寧に枝を払うことも大切です。また、竹を運ぶために荷台が10mの大型トラックの入れる道路沿いに竹置き場も必要となります。

この条件を満たす竹林の持ち主を紹介していただき、10月末から竹林伐採作業が始まりました。一箇所ですら50本以上、三箇所ですら150から200本集まると、トラック輸送を頼むことにな



竹材で作って気仙沼の海に設置される筏

ります。昨年度は、滑川町と川島町の地主さんの協力もいただき、3回の輸送により合計500本を、被災地に送ることができました。

通常の竹林整備では、チェーンソーで無雑作に竹を切り倒します。適当に玉切りし、枝もチェーンソーではらいます。

筏用材では、9mの用材を丁寧に扱い、運び出す作業もあります。どんなでもできる力仕事で、主要な作業です。そこで作業員が多ければ多いほど作業が進むことになります。作業者を募集したところ、プロジェクトメンバーも含めて地域の方々や、枝払いなどの軽作業もあり、女性の方にも参加していただきました。

参加された方々も、何か被災地のためにできることを求めています。東北に行くキッカが掴めなかった方に、近隣で形の見える支援活動に参加できた事を、喜んでいただきました。

被災地では、まだまだ筏用材を必要としています。我々も2012年度も、秋から竹支援伐採事業を継続します。そして、この事業が近隣に広がっていくことを願っています。



鶴ヶ島市の竹林で整備を兼ね竹を入り出す



切り出した竹を大型のトラックに積み込む

2011年度『アユ溯上作戦』の実施結果報告

■報告 鈴木勝行(荒川流域再生プロジェクト)

管理が課題の小瀬戸堰(入間川)と魚道の設置が
必要な宮ヶ谷戸堰(都幾川)と中里堰(高麗川)

3ヶ所で稚アユの標識放流

2010年度の結果を受け、2011年は、都幾川の矢来堰上流、越辺川の株木堰上流、入間川の矢嵐堰上流の3ヶ所でアブラビレを切除し、合計で9,254尾の標識アユを各河川に放流した。

最初の計画では、都幾川と越辺川での標識作業は4月10日に実施する予定であったが、水温が低い状態が続き、調査用の稚アユを確保できず、都幾川と越辺川標識作業を17日、入間川での作業を24日に延期して行った。

17日は、20kgの稚アユを埼玉中央漁協の活魚運搬車で、都幾川と越辺川の2会場へ運ぶことができた。

都幾川では、矢来堰の上流、関越自動車道の橋桁下で、比企の川づくり協議会や友釣りグループの人たちが作業を行い、3,195尾の標識アユを放流した。

越辺川では、東武東上線の鉄橋の上流で、高麗川との合流点の下流で作業を行った。地元高麗川ふるさとの会の人たちや新河岸川流域の人たちなど26名で標識作業を行い、3,100尾の標識アユを放流した。

4月24日の入間川の名栗溪谷にある千歳橋上流での標識放流作業には、さやま環境市民ネットワークなど入間川をフィールドにして活動している人たちや調査研究をしている東洋大学の学生など35名が集まり、作業を行い、2,959



越辺川と高麗川の合流点下流での標識作業

台風で増水した高麗川北坂戸橋での溯上調査
尾の標識アユを放流した。

台風の影響で困難だった調査

6月のアユ漁の解禁前に都幾川、槻川、越辺川、高麗川に釣り人から情報を求める看板を設置し、オトリ鮎店があ



る入間川では、上流域にある店に情報提供を求めるポスターを掲示してもらった。

2011年の溯上調査期間は、台風や天候不順の影響で、増水や濁水の時期が多く、調査日数を十分に確保できない可能性があったため、危険な増水時にも調査を行った。

合計で3回の溯上調査を兼ねた地曳き網を高麗川、都幾川、越辺川で実施したが、増水などにより、都幾川以外ではアユの捕獲ができなかった。

反面、3年目を迎えた私たちの活動も釣り人に知られるようになり、入間川や都幾川などでの標識アユの捕獲状況等について、多くの情報を寄せられる



都幾川・槻川合流点での地引網による溯上調査

ようになった。

2011年度の4河川での調査回数は合計で43回、調査参加人数は延べ351人、標識アユの捕獲数は合計33尾で、放流数に対する回収率は0.33%であった。

次に、各河川での調査の経緯と結果報告を行う。

1. 入間川での溯上調査の結果

入間川については、調査区間が全て友釣り専用区であったため、友釣りの愛好グループに協力してもらい、友釣りによる調査を行った。

調査は、台風による増水により十分な調査期間が取れなかったが、標識放流をした千歳橋から上流部の飯能市名郷までの全区間で行った。

放流場所から800m上流にある宮沢湖への取水堰である小瀬戸堰下流で1尾、放流場所の下流で6尾のアブラビレが欠けた標識アユを捕獲できた。しかし、小瀬戸堰上流では69尾のアユが捕獲できたが、全て標識アユではないという結果となった。

ほとんどの標識アユは小瀬戸堰を溯上することができず、放流場所周辺に留まったと考えられる。

小瀬戸堰は、魚道の出口に取水口と下流への排水路が隣接しており、構造的に魚道の機能を果たせていない可能性が高いと考えられる。



入間川小瀬戸堰の魚道と水落しの状況

2. 都幾川での溯上調査の結果

都幾川については、放流した矢来堰上流から都幾川町の新玉川橋上流の宮ヶ谷戸堰までの区間の調査を行った。

今回の調査では、7月の台風6号の影響か、12尾の標識アユが、決壊した放流点下流にある矢来堰の下で捕獲されたという情報が釣人からあった。

都幾川の上流に溯上した標識アユは、上用水堰を溯上し、さらには、鞍掛堰を上り、11 km上流の槻川との合流点まで溯上したという結果が得られた。投網を打っている人から、さらに4 km上流にある新玉川橋の下流の瀬で、2尾の標識アユを捕獲したという情報があり、最終的に新玉川橋の上流にある宮ヶ谷戸堰まで15 km遡上したことが確認できた。

宮ヶ谷戸堰は魚道がなく、落差も大きいことからアユの溯上は困難であると判断し、今回は堰の上流川の調査は行わなかった。



都幾川での最上流の確認点である宮ヶ谷戸堰

槻川については、合流点から下里堰を経て、栃本堰まで調査したが、標識アユは確認できなかった。

3. 越辺川での溯上調査の結果

越辺川については、標識アユの捕獲数が少なかった。9月には、今川橋の上流で地曳網での調査も行ったが、標識アユは確認できず、放流場所から約7 km上流の今川橋上流と約10 km上流の越辺川橋下流で標識アユが捕獲できた。

越辺川については、途中にある赤城堰と苦林大類堰には魚道があり、長岡堰と西戸堰は落差が 30 cm ほどであることから、溯上ができたものと思われる。

越辺川橋上流にある久保堰から上流部の調査では、標識アユの確認はできなかったことから、最終的にここが最終到達点と判断した。

4. 高麗川での溯上調査の結果

高麗川については、多くは3km上流にある最初の堰である粟生田堰の下で捕獲された。魚道とは反対側の左岸側で捕まえたことから、魚道を見つけられなかった可能性も考えられる。

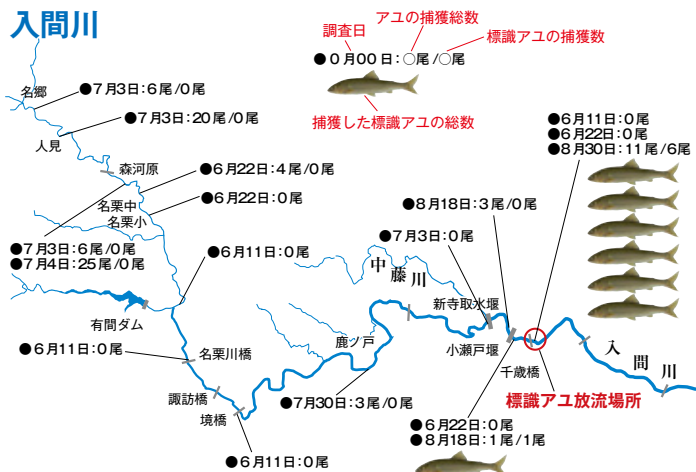
その上流部で確認できたのは、4 km 上流にある中里堰の下流であったが、数は1尾のみと少なかった。

その上流部にある高麗川5号堰までの区間では確認できなかったことから、魚道がなく50 cm以上の落差のある中里堰をほとんどのアユは遡上できなかったものと考えられる。

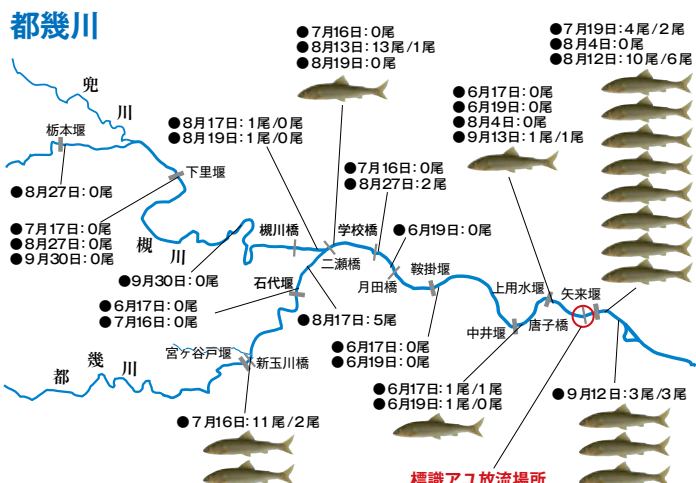
中里堰の上流部にある高麗川 5 号堰には 2m 以上の落差が発生していることから、それ以上の遡上は、困難であると考えられ、今回、5 号堰上流の調査はほとんど行わなかった。

2011年度 標識アユ捕獲結果 MAP

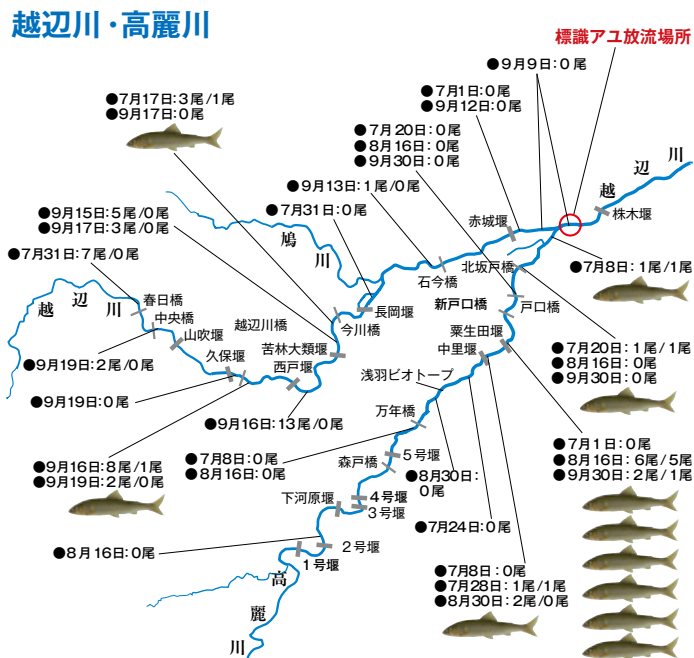
入間川



都幾川



越辺川・高麗川

越辺川での最上流の確認点となった
毛呂山町にある久保堰

高麗川での最上流の確認点となった
坂戸市にある中里堰

17年間にわたる荒川流域一斉水質調査についての考察

県民の取組みにより、最低環境基準 E類型から脱出した不老川、芝川

<荒川流域ネットワーク> 渡邊 勇

はじめに

西暦1995年より、全国に先駆けて一年も欠かさず荒川一斉水質調査を継続してきたことは埼玉県における河川の水質改善に大きな貢献をしてきたと思います。1995年の水質調査に参加された団体は、27団体で103箇所の水質調査から始まり、今日までに最も多く参加した団体数は68団体で378箇所の水質調査が行われました。

埼玉県の中央を流れる荒川流域の市民団体が17年にわたり水質調査を行うことにより、荒川流域の水質がかなり改善されていることが分かり、荒川に関心を持ち、さらに親しみを感じられるようになった県民はかなりの多くなったと思います。

近年、水道が出来たことで、飲み水に不自由しない生活になり、川を忘れてしまった私達が、川存在を再確認できるようになったことは、この事業が目指していた目標を達成しつつあるということが出来るでしょう。

17年間の水質調査結果の考察

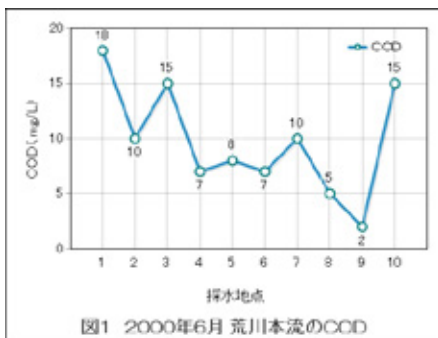
1995年より、気温、水温、におい、にごり、COD、pH、NH₄⁺、界面活性剤、電気伝導率について測定し、CODと電気伝導率の測定結果を地図上に丸と四角で表し、川の水質が一目で分かるようにするために、マップ化してきました。こうした取り組みは流域全体ばかりか埼玉県全域に広がり、市民団体、自治体や大学などが参加する大きな市民活動になり、これまでの成果が荒川流域の水質の改善に至っているものと、考えられます。

そこで、2000年～2011年における市民団体などが実施してきた水質調査の結果の中から、荒川本流のCOD測定結果をグラフ化してみました。

まず、2000年の荒川上流から下流

までの測定結果を図1に示しました。

荒川の上流でCOD値18mg/Lという高い値を示したことは驚きです。COD値が18、15、10、8mg/Lは高い値です。水浴基準ではCOD8mg/L以上で水浴が不可になります。



●試料の採水地点

1. 大滝村 中津川合流
2. 大滝村 中津川
3. 大滝村 久那橋下
4. 秩父市 武の鼻橋
5. 皆野町 親鼻橋

6. 長瀨町 白鳥橋
7. 寄居町 玉淀河原
8. 川本町 植松橋
9. 吹上町 大芦橋09
10. 上尾市 開平橋



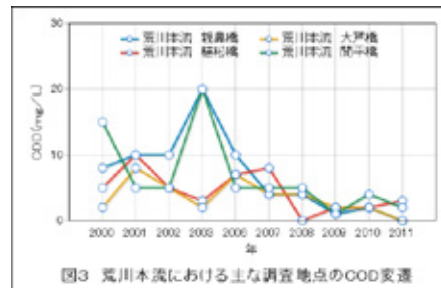
●試料の採水地点

1. 秩父市 中津川合流部
2. 秩父市 佐久良橋
3. 秩父市 和銅大橋
4. 皆野町 親鼻橋
5. 長瀨町 高砂橋

6. 寄居町 小園
7. 深谷市 植松橋
8. 鴻巣市 大芦橋
9. 上尾市 開平橋

図2は2009年、2011年における荒川上流から下流までのCOD値を表したものです。最大のCOD値が6mg/Lと図1に比較してかなり低くなっており、荒川本流の水質は大幅に改善しました。

図3は、荒川本流の主な調査地点に対する2000年～2011年におけるCODの変遷を表したものです。この図3から有機物による汚染の指標であるCOD値が年々低下し、有機物による汚染が改善されていることがわかり



ました。荒川本流の水質が改善していることは、当然支流の水質も改善していることになります。

今回は荒川本流を大まかにみてきました。支流についても水質調査を実施した団体が考察して頂きたい。とくに、現在もCOD値が高い値を示す地域では、何らかの原因がありますので、是非原因と改善方法を検討して頂きたい。

また、年度の経過をグラフ化するために当たって調査地点が一定に決まっていなかったため、グラフ化ができないことが多い。今後、重要な調査地点は毎年同じ調査地点をきめて、測定して頂きたい。つまり定点測定です。

環境基準E類型からの脱出

水質汚濁でワーストワンといわれてきた不老川、芝川が図4、図5が示すように、年々水質が改善されてきました。その結果、平成24年2月24日の埼玉県告示によると不老川の環境基準（類型）E類型からC類型、芝川はE

図4 不老川(不老橋)におけるBODの変遷

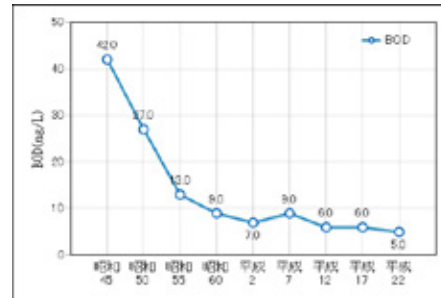
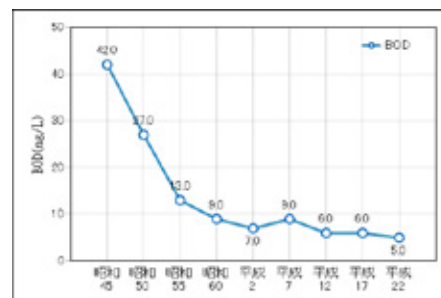


図5 芝川(八丁橋)におけるBODの変遷



※図4、図5のデータは埼玉県環境部から公表されているものをグラフ化したものです。

類型からD類型にランクアップされました。

以上の改訂により、埼玉県には「E類型」の河川が無くなりました。大変すばらしいことです。

埼玉県の「里川づくり県民運動」

2012年2月19日（日）第16回荒川流域再生シンポジウムで埼玉県環境部水環境課副課長・針谷さゆり氏による「里川づくり県民運動」の講演で、埼玉県における面積の3.9%が河川で全国一の割合です。そのような意味からも川の再生に最も力をいれて取り組んでいきたい、と力説していました。

2009年度河川への発生源別BOD負荷割合は、生活排水が71.7%です。この結果から県民自らによる継続的な川の再生活動の実施が、水質改善にとって一番重要であるとしています。



嵐山町での水質調査風景。

埼玉県における水質改善の目標として「里川の再生」をテーマに「川の守り人の育成」、2012年度以降の展開（共助による川の再生）案が示され、この中には五感による河川環境指標、川の国埼玉検定、川ガキ養成事業等により、共助による「川の再生」県民運動の拡大が、計画されています。このような県民運動と荒川流域一斉水質調査がリンクして里川づくり県民運動の推進役として貢献していきたいと考えています。

まとめ

17年間（1995～2011年）にわたる市民団体、自治体、大学などの市民活動としての荒川流域一斉水質調査を継続してきたことは、埼玉県の川の水質改善に大きく貢献してきました。

2004年からは全国水環境マップ実行委員会にも参加し、全国一斉の水質調査も同時に実行してきました。今年、全国水環境マップ実行委員会が水大賞を受賞されたことは、今後の荒川流域一斉水質調査に弾みがつくものと確信しております。今後はデータを整理し考察ができるような調査の方法を確立し、年々水質が改善するような活動の展開を考えております。

この水質調査が里川づくり県民運動の一躍を担えるよう勧めてまいりたいと思っています。

荒川太郎右衛門地区自然再生事業

自然再生 通信

生態系モニタリング専門委員会及び 管理目標ワーキングの活動について

●荒川流域ネットワーク理事 川島秀男

荒川太郎右衛門地区自然再生協議会の近況について、お知らせいたします。桶川市と川島町との境界付近に位置する荒川太郎右衛門地区自然再生事業は、首都圏に最も近い自然再生事業と言われております。

平成23年度の生態系モニタリング専門委員会と管理目標ワーキングは、以下のように開催されました。

- 第2回 管理目標ワーキング
平成23年7月28日（木）
- 第3回管理目標ワーキング
平成23年8月8日（月）
- 第4回管理目標ワーキング
平成23年9月6日（火）
- 第17回生態系モニタリング専門委員会及び第5回管理目標ワーキング
平成23年10月6日（木）
- 第18回生態系モニタリング専門委員会・第6回管理目標ワーキング合同会議
平成23年11月22日（火）
- 第19回生態系モニタリング専門委員会
平成24年1月23日（月）

平成24年4月24日（火）13:00～17:

00、同協議会の第20回生態系モニタリング専門委員会並びに第7回管理目標ワーキングの合同会議が開催されました。私も、特定非営利活動法人荒川流域ネットワークの一員として参加しましたので、会議の概要について、下記の通りご報告いたします。

まず会議に先立って、現地視察を行いました。

- 1.工程と視察場所：ホンダエアポート前の広場集合・工程・視察場所説明
- 2.平成23年度に整備した湿地再生地区の現地視察
- 3.上池旧流路とモトクロス場跡地の工事場所視察
- 4.下池河畔林の工事ハンノキ育成試



ハンノキ育成地。



旧流路再生湿地（太郎右衛門橋右岸下流）。

験箇所視察

5.ハンノキ移植地視察

次いで、桶川市農業センターにおいて、会議を行いました。行政・学識経験者・市民団体およびボランティアなど情報の共有化とネットワークの構築が、重要であると痛感しました。

この流域にも、トキやコウノトリが飛んで来てくれるといいな！と思いました。



ハンノキ育成試験箇所。

「NPO法人比企自然学校」設立紹介

昔の里山の自給的暮らしから学び、比企の自然と文化を次世代にバトンタッチするために!

<NPO法人比企自然学校代表・荒川流域ネットワーク理事> 千葉茂樹

昨年経験した計画停電など、今の私たちの暮らしはぜい弱な基盤の上に成り立っていることを改めて実感いたしました。

今からわずか50年ほど前まで、私たちの先輩は雑木林から山菜や薪を採り、農地を開墾してお米・穀物や野菜をつくり、川で魚やシジミを獲って食べる暮らしを営んできました。

比企自然学校は、比企の自然と文化を次世代にバトンタッチするため、都市住民にも呼び掛け、かつての食とエネルギーの自給的な暮らしにレクリエーション、学び、健康、グルメ、交流、自然再生などの要素を取り入れ、環境教育、都市農村交流による地域おこしを開始します。

特に、次世代を担うこども達にとっ

ては、こどもの頃の様々な自然・生活・社会体験が、モラルや人間関係能力の高い豊かな人間性を育み、やる気や生きがいのある豊かな人生の基盤となります。

お知らせ

川での様々な活動を進めていくため、今年は、以下の通り川の体験活動指導者養成研修会受講者、夏休み川キャンプスタッフを募集します。

【川の体験活動指導者養成研修会 受講者募集】RAC初級研修会

川での体験活動を安全かつ効果的に行うため、指導者養成研修会(初級)を開催します。受講者を募集します。RAC初級が取得できます(登録料は別途、必要)。

■日時：6/22(金)～6/24(日)、2泊3日(宿：東松山市内の民家)

■場所：都幾川(鞍掛橋周辺)

■内容：安全対策、プログラムづくり、参加者理解、指導法等
(講義：8時間、実習13時間)

■参加費：2万円程度(宿泊費、食費、保険代の実費程度)

■定員：12名程度(先着順)

■主催：森環境教育事務所との共催



農家の庭でたき火をしている都会からきたこども達、2012年2月、写真：池袋自然クラブ

【夏休み 川賊キャンプ スタッフ募集】

以下のキャンプのスタッフ2名を募集します。連続して宿泊できる方で、上記、RAC研修会(参加費は自己負担)を受講していただきます。日給、1万円程度を支給します。

■日程 1回目：7/30(月)～8/2(木)、3泊4日 2回目：8/13(月)～8/15(水)、2泊3日

■フィールド：都幾川・槻川(ときがわ町・小川町・東松山市)

■対象：小中学生 20名

■主催：NPO法人との共催

(キャンプ参加の問合せ先：エコ・コミュニケーションセンター TEL03-5957-1301(エコム))

■問合せ・申し込み先：TEL080-6645-4099(千葉、月～金、9～17時)

Email：hns.hiki.tv@gmail.com



比企自然学校設立記念シンポジウム2012.5.3



ため池の水を利用する耕作者総出の共同田植え、1961年、写真：村田宏吉



昨年7月の台風で崩壊した入間川の上奥富堰が災害復旧事業で修復。以前の溯上環境に戻る

昨年狭山市が国に申請していた崩壊した上奥富堰の災害復旧事業が、現在進められている。5月31日に工事が終了する予定。経費は9000万円近く掛かるという。上下流に鉄の矢板を打ち込んで、その間にコンクリートを流し込み、下流側に2m近い落差のある堰が復活した。

これから県が進めている「新しい川の再生事業」で、魚道の設置など、同堰の溯上環境改善に取組

む予定だが、総合的な計画のもとに工事が行われていないこともあり、しっかりした環境改善の事業になるように、これから県と協議していきたい。



編集後記

今年は、東京湾から溯上してきた稚アユのセシウムの検査があり、結果的には問題ないとされたが、例年と比べ水温が低い日が続いたため、2週間ほど溯上時期が遅れた。さらに水温が上がり始めたところで、季節外れの増水に見舞われたため、各漁協に対する稚アユの提供予定が大幅に狂い、私たちの計画していた標識放流作業も2度の延期を余儀なくされた。改めて自然を相手の事業を行うことの難しさを実感した春でした。(鈴木)